

【放射性セシウムが吸収されやすくなる要因と対策】

国、福島県において暫定規制値(500 Bq/kg)を超過した玄米が生産された要因について解析が行われました。

国等の調査結果から、土壌中の加里含量が少ないと放射性セシウムが吸収されやすいたことが分かりました。

また、土壌表層の放射性セシウム濃度が高いと吸収されやすい状況が指摘されています。

このことから、放射性セシウムの吸収を抑制するため、土壌中の加里含量を適正に維持し、耕うんにより土壌表層の放射性セシウム濃度を低下させる必要があります。

【平成24年産米の作付けに向けて】

千葉県は平成23年産米の放射性物質検査においては暫定規制値を超過した玄米はありませんでした。しかし、千葉県では、新たな基準値(一般食品:100 Bq/kg)への移行にとめない、次の点に留意した管理を全農家へ呼びかけています。

準値(一般食品:100 Bq/kg)への移行にとめない、次の点に留意した管理を全農家へ呼びかけています。

(1)土壌中の加里含量の適正化
水稲の施肥基準量の加里(基肥6~8 kg/10 a、穂肥1~3 kg/10 a)を施用します。

特に、次のような水田では加里不足が予想されますので、加里の施用が必要です。

ア倒伏回避のため少肥栽培により加里量も少ない水田
イ基肥一発型肥料により穂肥分の加里量が少ない水田
ウ稲わらを水田から持ち出した水田(稲わらには加里が多く含まれているため)

(2)適正な耕うんの実施
入水前の耕うん可能な時期に、深さ15 cmを目標に耕うんを行います。特に、平成23年に休耕した水田や、谷津田等で秋耕が十分でない水田では、必ず耕うんを行います。(保坂)

玄米への放射性セシウム吸収を抑制する技術

(加里の適正な施肥と耕うんで安全と安心の確保)

技術 & 情報

害虫を捕食する天敵ダニ(左上)



天敵ダニが サヤインゲンを守る

～スワルスキーカブリダニを利用したアザミウマ類の防除～

小櫃川流域の水田地帯では、2月から7月にかけて、ハウスでサヤインゲンが栽培されています。近年、ハウスのサヤインゲンにおいて、アザミウマ類などの微小害虫による被害が深刻化しています。これらに比べて、春から初夏にかけて気温の上昇とともに個体数が急増し、加害による果実の秀品率低下や、樹の生育抑制を引き起こします。6月以降の収穫では、特に大きな被害が出ます。



天敵放飼時の様子

そこで、君津農業事務所では昨年からの生物農薬であるスワルスキーカブリダニの導入試験を行い、アザミウマ類の防除効果を調査しています。「アザミウマ類の被害を抑えられ、収量が増えた」と、効果を実感していました。

スワルスキーカブリダニはアザミウマ類やコナジラミ類、それにホコリダニなどを捕食する、いわゆる害虫の「天敵」です。天敵の利用は化学農薬に頼らないため、ちばエコ栽培への取り組み推進につながります。農業事務所では今後も天敵の利用拡大を推進し、環境への高い意識を持つ生産者の取り組みを支援していきます。

この「天敵」をサヤインゲンの開花期にあらかじめ放飼しておくことで、アザミウマ類の被害を抑制でき、実際にスワルスキーカブリダニを利用した生産者は「夏場の薬剤散布の回数を減らせたため楽になった」

(野原)